■島嶼スケッチ

沖縄にて奄美を考えたこと

花井　恒三（奄美群島広域事務組合・奄美群島観光連盟　事務局長）

＜はじめに＞

甲子園球場で，鹿児島県代表と沖縄県代表が対戦するとき，地元の応援が真っ二つに割れる土地柄の奄美…。

それは，島津氏の征縄役を境に，それ以前が琉球王朝，それ以降が薩摩藩に所属した歴史と，近年の交流も常に北（本土）と南（沖縄）の双方にウイングを拡げて交流してきた奄美の特異性によるものなのだろう。

沖縄の方たちが奄美を訪問されるとき，次のような話をたびたび聞く。

「沖縄の昔が，今，奄美にある。」「沖縄になくて奄美にあるもの，それは，島全体が森で入り江が多く海峡を持っている。それに，リュウキュウマツとソテツが豊富に残っている。」

これらの話の延長線上に，私は，奄美のモチーフを次のように語っている。

「沖縄は太く生きる島，奄美は細く長く生きる島」「沖縄の奥座敷奄美，奄美の奥座敷加計呂麻島，その大奥が与路島・請島」「奄美は沖縄っぽいけど沖縄でない。本土っぽいけど本土でない，融合の魅力」

大学にたとえると，「総合大学の強みが沖縄で，単価大学の強みが奄美」

「温帯文化と温泉文化に慣れ親しんだ日本人が対極の亜熱帯・海水（洋）文化を沖縄で味わい，その10人に１人のもっと奥を極めたい人のフィールドが奄美」

＜県際交流＞

先月（７月），私は数年ぶりに県際交流で沖縄を訪問させてもらった。県際交流とは，奄美群島と沖縄北部広域圏との交流のことである。

平成11年度から，両県の支援により，鹿児島県の南端と沖縄県の北端が交流をすすめることが両県の交流に寄与し，併せてこの地域が両県の中心軸を形成するポジションを得る，との趣旨で「奄美・やんばる広域圏交流推進協議会」が発足した。会長職及び事務局は，双方の広域行政組織である奄美群島広域事務組合と沖縄北部広域市町村圏事務組合とが２年交代で担当することになっている。

これまで，設立シンポジウム，行政視察交流，議長視察交流，民間団体視察交流，共同観光物産展（於前橋市），共同ホームページ開設，児童・生徒による「交流探検隊」及び「音楽祭」交流，青年層の洋上研修「クルージングネットワーク形成事業」，人材育成事業「移動かりゆし塾」及び「奄美TIDA（ティダ）ネシア塾」の開催，やんばる産業祭及びつつじ祭りへの奄美側の参加，などの実績を積んできた。

奄美側のやんばる圏域での視察先は，これまで，マルチメディア館，コールセンター，海洋博記念公園，亜熱帯植物園，美ら島水族館，野生生物保護センター，フライト農業，教育旅行＆エコツアー受入施設，道の駅，名桜大学，プロ野球誘致施設，リュウキュウアユ育苗施設，オリオンビール工場，博物館，美術館，など数多くの施設と運営されている方々との交流をすすめてきた。

今回は，万国津梁館，国立沖縄工業高等専門学校，鍾乳洞酒蔵，スローフードレストラン，タラソ沖縄（タラソテラピー施設），体験型観光施設むら咲むら，などを視察・交流した。

また，この機会をとらえて，帰路の那覇市では，沖縄奄美会との懇親会交流も恒例行事となっている。

このほか，当協議会の活動が刺激となって，市町村間の個別交流をはじめ，やんばる圏が事業導入した，「(奄美との）広域連携による自律型経済圏形成事業」を通じた，青年たちのワークショップ交流，道の島・美の交流展，奄美青年グループの「沖縄かりゆし塾」参加，名桜大学生の奄美ゼミ・奄美まつり参加，復帰っ子交流，沖縄のマスコミ（新聞・雑誌・テレビ・ラジオ）による奄美特集，奄美でのオリオンビールまつりやオリオンベースボール奄美地区代表決定戦など，波及効果は測り知れないものがある。

特に，近年，奄美から名桜大学及び高専への進学する学生も増えており，喜ばしい限りである。

以上，今回は，県際交流に限って紹介したが，那覇市をはじめとした，やんばる圏域以外の地域との交流も数多く，市町村や団体等によって個別にすすめられている。

＜沖縄にて奄美を考えたこと＞

1．年508万人の観光客を迎える沖縄，那覇市内の主要施設を訪れる際のタクシー料金は，たいていワンメーター（450円）か，どんなに行っても千円台で，2千円を超えるところはまずない。(タクシー料金への助成制度があると聞いた。)

ビジネスホテルも居酒屋も，カラオケボックスも，皆，安価であるし，沖縄料理もスローフードに限りなく工夫されている。

奄美群島の10倍を越える観光客を受入れ，「観光産業」に特化している沖縄ならではの光景で，ウーンとうなるばかりであった。

それでは，奄美観光はどうすればよいのか？私は，次のように考えている。

奄美は格安満足度で行くのでなく，経済満足度（自給率や物々交換，相互扶助システム）の高い島の美学を観光の「売り」とし，そのためのシナリオとコンセプトをまとめ，日本が忘れかけてきている儒教美学がいまなお流れている奄美の文化水準の深さを味わってもらうことで来訪者に生きる力を与える，そのようなモチーフの島になれたら，と考えている。

従って，これからの奄美は，意識して生涯学習人口や定年力人口，福祉人口の産業人口への参入を図り，有償ボランティア，ＮＰＯ等の活動によるスキ間産業の創出を促すことが肝要であると考える。

このことが，奄美が得意としてきている「文化産業」や「産業文化」に磨きがかかり，「現金収入は高くなくても経済満足度の高い，アイランドテラピー（島でいやす）の王者」としての道を歩んでいけるものだと信じている。

2．観光客が那覇市から日帰り海水浴コースで行け，ダイビング客に人気のあるクラマ諸島を見てみたいと，久米島，渡嘉敷島，座間味島の３島を訪れたが，いずれの島も，村営フェリーのほかに，定期高速船を保有し，那覇市とそれぞれの島を結び，観光客を運んでいるさまには圧倒された。建造費は１億５千万ぐらいかと尋ねると，その２～３倍ぐらいとの答え，どの事業費を活用したのだろう，と思った。種子島・屋久島や甑島に走っている高速船とほぼ類似のタイプであった。

奄美では，不定期の高速船と多くの海上タクシーが利用されているが，近年は小回りのきく，島間高速船の必要性がうたわれている矢先，よい体験となった。

その一方では，奄美で現在保有されている高速船や海上タクシー，それに，観光面でシステム化されていない遊漁船など，観光商品の提案と受入体制のシステム化の工

夫次第では，個人ツーリズム，体験型ツーリズムに需要の高い奄美の受入キャパは十分にあり，高速船の新規導入より現行体制の工夫が先決，とも感じた。

3．久米島は，県立海洋深層水研究所と民営工場が有名であるが，新たにタラソテラピー施設をオープンした。私も，1回入浴しただけで，皮膚のできもののかゆみが入浴後なくなった。海洋深層水を地下から汲み上げて利用しているが，他の健康関連施設との連動性がなく，自己完結型の施設となっていたため，運営は大変だろうなと思った。沖縄本島の，もっと規模の大きなタラソ施設も，その施設のみの自己完結型であった。

奄美でつくる場合は，宿泊施設や医療施設，他の健康増進施設（リハビリ，トレーニングなどエクササイズ），本モノの海中での運動療法や砂浜タラソ利用も含めたトータルプログラムの開発と，セラピー系マンパワー（セラピスト）の確保など，可能な限りの総合力が発揮された施設間のリンクが必要だと感じた。

【久米島の沖縄県海洋深層水研究所】

4．渡嘉敷島の海水浴場は，冷水シャワーでなく，温水シャワー施設があった。港から海水浴場までの往復バス代が5百円，海水浴場の温水シャワーとコインロッカー，休憩施設利用がセットで5百円の合計千円，とワンセットになっており，上手な運営がなされていた。また，海水浴場付近でビーチパラソル等のレンタルをしているおばちゃんたちの目もお金の目をしておらず，沖縄の原風景に出会えた感じで，ホッとした。

渡嘉敷島は，座間味島と共に，沖縄戦で集団自決のあった島で，港の待合室と博物館が併設されており，待合時間を利用して，その島の歴史を知る観光客の利便に応えていた。奄美も，各島の港や空港の待合室に，将来，当該市町村の博物館や歴史民俗資料館の分室（展示室）を整備して，文化性を高めていくことが知的観光の島へとつながっていくものと考えた。

【渡嘉敷島の海水浴場】

5．座間味島は，奄美の加計呂麻島周辺の島々がコンパクトに近づき合ったような抜群のロケーションで，那覇市から高速船で50分程度の近さにあり，人気スポットの程がよく理解できた。

6．モノづくりで驚いたのは，沖縄産品自動販売機にあったウコンの高価格飲料のボトルに，「沖縄県工業技術センター共同開発」と記されたラベルを見たときだった。色々な仕掛けをするものだと思った。

7．それではここで，数年ぶりの沖縄訪問だっただけに，多くの書籍やパンフ，チラシを入手してきたが，これからの奄美の生きる方向とマッチングするテーマに絞って紹介しよう。

・「沖縄の物流革命」
・「沖縄は，いま，ブランド王国へ」（NPO法人チャンプルツーリズム協会）
・「沖縄が自然学校」（沖縄自然学校ネットワーク）
・「沖縄・元祖スロー王国」
・「沖縄・名作の舞台」
・「高等学校琉球・沖縄史」（沖縄歴史教育研究会）
・「高等学校琉球・沖縄の歴史と文化」（沖縄歴史教育研究会）
・「沖縄・ビーチガイド」
・「沖縄・世界遺産マップ」（㈶沖縄観光コンベンションビューロー）
・「沖縄観光情報ファイル美ら島」（㈶沖縄観光コンベンションビューロー）
・「沖縄台風対策マニュアル（空便利用者編）（㈶沖縄観光コンベンションビューロー）
・「日帰り離島めぐり」（㈶沖縄観光コンベンションビューロー）
・「沖縄フィルムコミッション」（㈶沖縄観光コンベンションビューロー）
・「南国リゾートウェブイング」（㈶沖縄観光コンベンションビューロー）
・「気をつけよう海のキケン生物」（沖縄県福祉保健部）
・「かりゆしウェアテキスタイルデザインコンテスト」（主催沖縄県）
・「のんびり沖縄（ロングスティプラン）」（27泊28日プランほか）
・「医食同源」（ウェルネスチャイナ心彩身）
・「東村やま学校うみ学校」（東村エコツーリズム協会）
・「沖縄県推奨優良県産品ガイド」（沖縄県）
・「糸満観光農園」
・「やんばる自然塾（エコツアー）」
・「沖縄を食す！元祖スローフード」
・うたあしび「歌・楽座」
・「沖縄スタイル……移住計画」
・「沖縄スタイル……沖縄で暮らす～東京・大阪で堪能する沖縄料理～」
・「琉球王朝秘伝・発酵うこん」
・「夢みる南国エステ」
・「沖縄の潮干狩とキャンプ場マップ」
・「沖縄・海遊び」
・「はじめての奄美」（日本トランスオーシャン航空機内誌）
・「沖縄ロングスティ」
・「沖縄県産品通信販売カタログ」（わしたショップ）」
・「沖縄で癒す」
・「沖縄アウトレットモールあしびな」

追記……これらのほか，「スポーツ合宿」「アイランドキャンパス」「教育観光」「大型クルージング船誘致」「視察研修」「農業観光」など，奄美でも今日的課題となっている図書・パンフ等さがしたが見当たらなかった。これらは，奄美が先例となる情報誌を作成しようと考えている。

＜まとめ＞

「沖縄は観光で行くところ。奄美は住んでみたい落ち着いた島」とは，Ｉターン希望者からよく聞くことばである。沖縄では，明日現金を持たなければ生きていけない雰囲気があったが，帰路の奄美空港から名瀬市へ向かうバスの中から身近に感じる奄美の山々に抱かれると，ひょっとしたら奄美では明日現金持たなくても，この野山の草でも食べて生きていけそうな雰囲気を感じることだった。

いま我が国は，沖縄をアジア・太平洋のポータル（玄関口）と位置づけ施策展開をす

すめているが，沖縄がその役割を担うためには，沖縄観光がこれまでヨロン島を必要としてきたように，今後は，「昔の沖縄が残っている」奄美全体をとり込んで沖縄の多様性を発揮する時代に入った。

そのためには，奄美が沖縄に同化するのではなく，奄美は沖縄の奥座敷としての位置をキープすることにより，奄美・沖縄が「交流」の時代から，「ソフトの連携軸」へと移行する時代に入ったことを再認識できた旅だった。

従って，奄美群島振興開発特別措置法（通称，奄振法）とその計画も，「沖縄」と「離島」のそれの中間の位置を占めつづけることが国益に叶う道であることを主張しつづけたいと思う。

＜おわりに＞

私が今回の沖縄の旅で得られた満足度は，以上のように理屈っぽいものの見方・考え方・世界解釈ではない。「沖縄には会いたい人がいる!!あの人に会える!!」との願いが叶えられた満足度の方が大きかった。沖縄で会える人がいて，時間つぶしの空間を共有できて，視野を拡げられた満足度が旅の効果を高めたのだった。

奄美は本年度から，当組合が事業主体となって，奄美群島振興開発事業により，「奄美ミュージアム事業」がスタートした。文字どおり奄美群島民一人一人が「奄美には会いたい人がいる。あの人に会いたい!!」と指名される島の構成員になろう。また，出会う方たちには，奄美の魅力を語れる博物館員（学芸員）に皆がなろう，という人材と産業間のマッチングを目指す事業だ。

交流人口や半定住人口の満足度の最大の要素は「人と人との交流」満足度にかかっていると言われて久しいが，奄美は「男はつらいよ」のトラさんが千人，さくらが一万人いるトラさんピラミット型人材豊富な島である。「奄美ミュージアム推進事業」の成否が，やがて奄美が「知的観光の島」にグレードアップできるかどうかにかかってくると思う。

エッ，「沖縄のあの人」は男性だった？それとも女性だった？……ウフフフ，内緒ヨ